

陽だまりが咲く家で

櫻井知愛

人
物

多比良千尋（45）婦人科医

多比良理（46）千尋の夫

椎永遥（45）千尋の友人

河村映美（26）看護師

○春日スカイレジデンス・外観（夜）

高級感のある高層マンション。

○同・多比良家・リビング内（夜）

ダイニングテーブルで、ノートパソコンに映る文字を黙々と目で追っている

多比良千尋（45）。

画面にはネット記事。『夫婦『子なし』の文字が所々に目立つ。

廊下からやってくる多比良理（46）。

理「ただいま、千尋？」

千尋、ハッと振り返って

千尋「理……お帰り。やだ、もうこんな時間？」

理「仕事？」

千尋、咄嗟にノートパソコンを閉じる。

千尋「うん。仕事。明日の患者さんの事で」

小さなケーキ箱を手渡す理。

理「じゃあこれ食べて、一息ついて」

千尋「ありがとう。シフォンケーキ？」

理「病院の近くに流行りの店が出来てね。そ

れで、クリニックの方はどうだった？」

千尋「あ、うん……えっと……」

カウンターキッチンに入って行く千尋。

千尋「子宮筋腫が少し大きくなってたけど、
良性の物だし、まだ妊娠に支障があるレベ
ルじゃないから、心配しなくても大丈夫」

理「そっか……」

千尋「さ、食べよ食べよ」

食器棚の引き出しを開ける千尋。

理「……ねえ、千尋」

千尋「ん？」

理「いつまで続ける？不妊治療」

千尋「……」

握ったフォークを引き出しに戻す千尋。

千尋「ちょうど私も……それを考えてた」

理「一応僕だって医者だからね。現実を目を
逸らしてまで、これ以上千尋に負担をかけ
るのは本望じゃない」

千尋「でも、じゃあ子どもを諦めるって事？」

理「子どもは……諦めない」

千尋「諦めないって、どうするの？子どもが産める若い奥さんにでも乗り換える？」

理が千尋に歩み寄り、抱きしめる。

理「そんな事、するわけないだろ」

千尋「冗談よ。でも、どうするって言うの」

理「だから、そろそろ養子縁組の話を実際に聞きに行ってみよう」

千尋「養……子？」

理「本気で子どもを望むならそれしかない」

千尋「ち、ちよつと待って。養子の事までは考えてなかったから……突然過ぎて……」

理「僕たちは、子どもが欲しいからこそ、不妊治療を続けてきたんじゃないか」

千尋「私だって諦めるのは辛い。でも最近はどうもがいない暮らしの事も考えてたの。

だから今、理からやめ時を切り出してくれて、不思議とほっとした自分もいて……」

理「僕はずっと養子の事も考えてた」

千尋「理は、そこまでして子どもが欲しい？」

理「だって僕たちの両親も、先輩や後輩達だ

って、みんな結婚して子どもが産まれて、
幸せそうにしてるだろ？自然な事だよ」

千尋「私はこのまま二人きりでもいいと思う」

理「僕は、千尋と子どもと、三人で幸せな家庭を築きたいんだ」

千尋「二人きりだから感じられる幸せだって」

理「僕らの幸せの為には、子どもが必要だよ」

千尋「……少し考えさせて」

理の体を離す千尋。

○小石川総合病院・外観

大規模な総合病院。

○同・廊下

壁に『婦人科』の文字。

○同・診察室内

ぼんやりパソコンと向かい合う千尋。

映美の声「先生……多比良先生！」

千尋「……ん？」

河村映美（26）がファイルを差し出す。

映美「どうしたんですか？多比良先生がぼーっとしてるの珍しい。体調悪いですか？」

千尋「ごめん河村さん。昨日遅くまで論文に目を通してたから。少し寝不足なだけ」

映美「たまには息抜きも大切ですよ。あ、それ次の患者さん。初診なんですけど、どうしても多比良先生に診て欲しいって」

千尋、ファイルを受け取り中身を見て

千尋「椎永さん……？」

映美「ご存知の方ですか？」

首を傾げる千尋。

診察室のドアをノックする音。

千尋「どうぞ」

ドアが開き、椎永遥（45）が入ってくる。

千尋、遥を見て固まる。

千尋「遥……？」

遥、長い髪を掻き上げて耳にかける。

遥「久しぶり。千尋」

映美「お知り合いだったんですか？」

千尋「高校の同級生なの。びっくりした……突然どうしたの？」

遙「実はね、昨日、春日レディースクリニックで千尋を見かけて」

千尋「あつ！えつと……」

千尋、慌てて視線を泳がせて

千尋「河村さんゴメン。前田さんの採血のオーダー入れるの忘れてた。直接採血室に言っ
て来てくれる？」

映美「わかりました……」

診察室を出て行く映美。

遙「クリニックスの事、言っちゃダメだった？」

千尋「そういう事じゃないの。本当に。気にしないで。それで、どうしてここへ？」

遙「私ね、不妊治療をしたいの」

千尋「……本気で言ってるの？」

遙「この歳で妊娠出来るわけないって思ってるんでしょ……千尋なら私の気持ち分かってくれると思ったんだけど」

千尋「私なら？」

遥「だって、千尋も不妊治療してるんでしょ？」

千尋「いや、私は……」

遥「お願い。私どうしても子どもが欲しいの」

千尋「あのね遥、不妊治療をしても45歳で上

手くいく確率は1%以下よ」

遥「知ってる」

千尋「もし奇跡的に妊娠出来たとしても、母体にかかる負担も大きいし、流産のリスクも高い」

遥「分かってる」

千尋「子どもに障害が起こる可能性だって」

遥「障害を持って産まれた子どもは不幸？」

千尋「そ、そうじゃないけど……」

遥「私、大丈夫よ。全部覚悟してるから」

千尋「友達として心配してるの。私達の歳になると体より精神的な負担の方が辛いかもしれない。ご主人のサポートはどれぐらい」

遥「自分は不妊治療してるのに、患者にはやらせてくれないってわけ？」

千尋「違う。現実をきちんと理解した上で方

針を考えましようって言ってるの」

遥「ふうん……」

千尋「こ、子どもがいなくても、夫婦二人きりでも、そういう幸せの形だってあるわ」

遥「じゃあ千尋はそうするの？」

千尋「私は……」

診察室に入ってくる映美、小声で

映美「先生、前田さんの採血のオーダー入ってましたよ。本当に大丈夫ですか？」

千尋「あ、そう？ゴメンゴメン。えっと……」

立ち上がる遥。

遥「次回の予約、いつでもいいから一番近い日に入れて下さい」

千尋「遥……」

遥、ドアに手をかけて

遥「あ、そうだ。私、無事にCAになってね、

最近まで現役貫いてたのよ」

千尋「CA……そうだったんだ」

遥「そう。私もちゃんと夢叶えたの。だから

千尋は、何も気にしないでね」

息を飲む千尋。

診察室を出て行く遙。

映美「椎永……CA……あつもしかして！」

千尋「え？何？」

映美「椎永さんの旦那さんって、あのカメラマンの椎永亮平ですよ？」

千尋「え？カメラマン？そうなの？」

映美「ええ、友達なのに知らないんですか？何年か前に、椎永亮平が美人○△と結婚したって話題になってましたよ」

千尋「ゴメン。そういう情報は全然うとくて」

映美「多比良先生にも知らない事があって安心しました」

千尋、パソコンのキーボードを叩く。

検索バーに『カメラマン椎永』と入力。

マウスを転がす千尋。

手を止めて目を丸くする。

千尋「えっ」

画面にネットニュースサイト。『椎永亮平膵臓癌を告白』という見出しの記事。

立ち上がる千尋。

映美「先生？どうしました？」

千尋、診察室を飛び出して行く。

○同・廊下

遙の後を追ってくる千尋。

千尋「遙！」

足を止め、振り返る遙。

千尋「ごめんなさい、私、旦那さんの事知らなくて……その……病気のことも」

遙「それで……協力する気になった？」

首を横に振る千尋。

千尋「遥まで身を削ったら、旦那さんの看病をする余裕だってなくなる。それよりも今の二人の時間を大切にされた方がいいと思う」

遙「千尋にそんなこと意見する権利ある？」

千尋「……どういう意味？」

遙「私が第一志望の大学行けなかったの、誰のせいだったか忘れた訳じゃないわよね？」

顔が強ばる千尋。

櫻井知愛